

# 契約の完成と典礼的身体：洗礼・聖餐と婚姻・性愛の相同性に関する設計図的考察

KANNO Kazuhiko / Gemini 3 Pro Deep Research 2026.2.02

カンノさん、本報告書では、聖書全体を貫く一つの「生命体」としての物語を解明するため、ジェームズ・B・ジョーダン、ピーター・J・レスハート、およびラルフ・A・スミスの神学的系譜に基づき、キリスト教典礼（洗礼・聖餐）と夫婦の交わり（結婚・性愛）の間に存在する「契約の誓い」としての類推を、詳細な建築的構造分析とともに論じます。

## 第1章 儀礼神学の再構築：静的な徴から力強い行為へ

聖書における典礼や儀礼を理解する上で、まず私たちが脱却すべきは、サクラメント（礼典）を単なる静的な「徴」と見なす現代的な偏見です。ジェームズ・B・ジョーダンおよびピーター・J・レスハートの視座によれば、サクラメントは本質的に「力強い儀礼」であり、そこでは物理的な「要素」(res) や「言葉」(dicta) と並んで、「行為」(facta) が不可欠な役割を果たします。儀礼とは、神と民との間の契約関係を具現化し、更新するための建築的な手続きに他なりません。

サクラメントを理解するための論理的基盤は、レビ記の犠牲システム、すなわち出エジプト記から申命記にかけて詳細に記述された「設計図」に求められます。例えば、洗礼の儀礼的意味は、出エジプト記29章に規定された「祭司の任職式」の構造を参照することで、その全貌が明らかになります。そこでは、洗浄、着衣、そして油注ぎという一連の身体的プロセスが、聖なる任務への導入として機能しており、これが新約における「万人祭司」としてのキリスト者のアイデンティティを形成する設計図となっています。

## 儀礼の論理と効力

改革派神学の伝統、特にヴァン・ティル的な前提主義を継承するジョーダンらのアプローチでは、教会が儀礼や統治から逃れることはできないと主張されます。個人の主観的な知識や信仰の重要性を認めつつも、教会は目に見える「契約的行為」を通じて神との直接的な交わりを維持します。この交わりは、パン、ワイン、水といった「物理的手段」を媒介として行われ、天の父との具体的な一致をもたらすものです。

以下の表は、典礼と婚姻の儀礼的構成要素を比較したものです。

構成要素	洗礼・聖餐（キリストと教会）	結婚・性の営み（夫と妻）	契約的意義
開始の儀式	洗礼：古い人の死と新しい命への再生	婚礼：両親を離れ、一体となる誓約	独占的な帰属の確定
媒介の場	神の家（教会）：媒介の場所	家庭：聖なる一致の場	神と人との出会いの空間
定期的更新	聖餐：主の晚餐における共食	性の営み：身体的な愛の再確認	誓いの再確認と生命の養い
物理的徵	パンとワイン：キリストの体と血	肉体と性：一肉となる合一	具象化された愛の契約

サクラメントが「**契約の誓い**」であるならば、婚姻における行為もまた、単なる生物学的な反応ではなく、神の前で交わされた誓約を再演し、強化するための「**典礼的行為**」として理解されるべきです。

## 第2章 語彙的・概念的追跡：肉体、合一、そしてメシア的宴

ザビエル・レオン＝デュフールの手法に基づき、聖書における特定のキーワードがどのように「**契約の物語**」の中で発展していくかを追跡します。特に「肉」（flesh）、「結合」（union）、「宴」（banquet）という言葉は、キリストと教会の関係、および夫婦の関係を橋渡しする重要な概念です。

### 「肉」の概念的変遷：創造から栄光化へ

聖書において「肉」は、しばしば「弱さ」や「死すべき運命」を象徴しますが、それと同時に「人格的な一致の場」でもあります。パウロはコロサイの信徒への手紙において、私たちが「肉の無割礼」の中にいたことを、神への従順を欠いた法に反する状態として記述しています。しかし、キリストが私たちの「弱く、傷ついた肉」を共有し、死を打ち負かされたことで、この「肉」は神の永遠の命を享受する器へと栄光化されました。

婚姻における「**一体となること**」（一肉となること）は、創世記2章におけるアダムとエバの創造にまで遡る設計図に基づいています。ここで「肉」が強調されるのは、単に性的な結合を指すためではなく、分離されていた二つの実体が、本来の「**一つの生命体**」としての状態に帰還することを意味しています。この再結合の

プロセスは、キリストが教会をご自身の体として取り込み、自らの命で養うという「救済のドラマ」の地上における最も鮮明な類推です。

## メシア的宴としての聖餐：食卓における合一

「宴」の概念は、旧約から新約、そして終末へと向かう「契約の物語」の絶頂を示します。預言者たちはメシアの時代を「豊潤なワインと良き食事の宴」として描写しました。

1. **契約の批准としての食事**：古代近東の背景において、契約 (*b+r't*) はしばしば「**共食**」によって完成されました。ヤコブとラバムが石を積んで食事を共にしたように、食事は敵対関係を終わらせ、法的・人格的な結合を開始する「**外部的しるし**」です。
2. **カナの婚礼から主の晩餐へ**：イエスが最初の奇跡を婚礼の席で行い、水をワインに変えたことは、古い契約の不足を新しい契約の豊かさ（メシアのワイン）で満たすことを象徴しています。
3. **小羊の婚宴**：黙示録19章に描かれる終末的な宴は、教会の「**完成された花嫁**」としての姿を提示します。ここでの食事は、単なる栄養摂取ではなく、キリストという生命との真の「**交わり**」そのものです。

洗礼において「清められた花嫁」は、聖餐という「**婚宴の食卓**」に招かれます。この一連の流れは、夫婦が結婚式という開始の儀式を経て、日々の共食と性愛の交わりにおいて契約を深めていくプロセスと完全に呼応しています。

## 第3章 文学的・建築的構造の分析：エフェソ書5章の「設計図」

聖書を「**設計図**」として読む場合、テキストの配列そのものが神の知恵を体現していることに注目しなければなりません。エフェソの信徒への手紙5章21節から33節は、キリストと教会の神秘的な関係を、夫婦の日常的な関係の規範として提示していますが、その構造は精緻な「**キアスム**」（交差配列法）を形成しています。

### エフェソ書5章のキアスム構造

この箇所を分析すると、パウロが何を最も重要な「中身」として強調しているかが浮かび上がります。

- A : 21-22節：キリストへの恐れに基づく「**相互服従**」と「**妻の服従**」。

- B : 23-24節：キリストが教会の「頭」であり「救い主」であるように、夫が妻の「頭」である。
- C : 25-26節：キリストの「愛と自己犠牲」：教会を聖なるものにするための死。
- D（中心）：27節：教会の「栄光ある提示」：しみやしわのない、聖なる完成。
- C' : 28-30節：夫の「愛と養い」：自分の体のように妻を世話し、慈しむ。
- B' : 31-32節：アダムの創造の引用と「大きな奥義」：キリストと教会の合一。
- A' : 33節：まとめ：夫の愛と「妻の敬意」。

この構造の中心（D）にあるのは、キリストが自ら苦難を受け、教会を「栄光ある姿」でご自身の前に立たせるという目的です。夫の役割は、単なる権威の行使ではなく、この「中心的な中身」を模倣することにあります。すなわち、自らの犠牲によって妻を輝かせ、完成へと導くという「典礼的奉仕」です。

また、この箇所の「洗浄」と「提示」というプロセスは、婚礼前の花嫁の身支度を想起させますが、これは雅歌3章11節におけるソロモン王の婚礼の描写とも深く結びついています。雅歌に歌われる「心の喜びの日」の王の冠は、エフェソ書におけるキリストの十字架と復活による「勝利の栄光」を予影するものです。

## 第4章 默示録過去主義（プレテリズム）と契約の交代

聖書を一つの大きな「契約の物語」として捉えるN.T.ライト的な視点と、預言の多くが紀元1世紀に成就したとする默示録過去主義（プレテリズム）は、キリストと教会の結婚を歴史的な具体性の中で理解する助けとなります。

### 古い妻の「離婚」と新しい花嫁の「婚姻」

ジェームズ・B・ジョーダンやピーター・J・レスハートは、默示録を「契約の法廷劇」として解釈します。そこでは、不忠実な妻である背教したエルサレムに対する「離婚の宣告と審判」が、紀元70年の神殿崩壊という歴史的事実として描かれています。

1. 大淫婦の裁き：古い契約の象徴であるエルサレムは、メシアを拒絶したことでの「淫婦」となり、裁きの対象となります。この「離婚」は、新しい契約が法的に確立されるための必要なプロセスです。
2. 新天新地の降臨：默示録21章における新しいエルサレムの降臨は、単なる遠い未来の出来事ではなく、紀元70年以降に本格的に始まった「キリストと教会の婚姻関係」の完成された姿を、天の視点から提示したものです。
3. 歴史の中の結婚：プレテリズムは、私たちが現在、すでに「小羊の婚宴」の時代に生きていることを教えてくれます。毎週の聖餐式は、この完成された婚姻

関係の「定期的な祝宴」なのです。

默示録21章9節から22章5節までの「聖なる都」の描写を分析すると、そこにはかつてのエデンや幕屋、神殿の意匠がすべて凝縮されていることがわかります。これは、神が最初から意図していた「人間との共同生活の設計図」が、キリストという花婿と教会という花嫁の結合によって、ついに実現したことを示しています。

## 第5章 古代近東の背景と婚姻契約の「しるし」

ジョン・ウォルトン等の知見を補助的に用いることで、聖書が書かれた当時の「契約観」が、いかに典礼と婚姻の理解を深めるかを検討します。古代近東の宗主権条約（Suzerainty Treaty）は、神とイスラエル、そしてキリストと教会の関係を定義する「骨組み」を提供しています。

### 条約構造と婚姻の類推

条約の要素	契約神学的対応	婚姻・性の営みへの適用
前文と歴史的序文	神の救済の御業の宣言	互いの出会いと愛の歴史の共有
義務（法）	十戒、愛の戒め	貞潔と誠実さの誓い
証人	天と地、神ご自身	神と教会の証言
呪いと祝福	契約への忠実さの結果	合一の喜びと不忠実の悲劇
誓約の批准	犠牲の死、共食	性的結合（一肉となること）

特に重要なのは「契約のしるし」です。アブラハムに対する割礼は、契約がすでに発効していることを示す「具体的な標識」でした。現代において、洗礼の水や聖餐のパンと同様に、結婚における「性の営み」は、単なる喜びの追求ではなく、契約という見えない法的・霊的現実を、肉体という媒体を通じて「書き記す」行為に他なりません。

サクラメントが「恩寵の手段」であるように、婚姻における夫婦の合一もまた、互いを聖め、キリストの愛を深く体験させるための「恩寵のチャンネル」として機能します。ここで、性の営みは「寝室におけるリタージー（礼拝）」としての尊厳を帯びるのであります。

## 第6章 性愛と典礼：身体を通じた契約の更新

キリストと教会のための典礼である洗礼と聖餐式は、夫婦の礼拝である結婚と性の営みに類似する。これは単なる比喩ではなく、実体的な相同性（アナロジー）です。

### 聖餐としての性的合一

フランシスコ・サレジオが説いたように、婚姻における合一は、神の意志を日常生活の中で体現するための「召命」です。性愛における「エロス」は、神への「アガペー」と対立するものではなく、むしろ神の過剰な愛を人間が体験するための「予習」となります。

1. **自己贈与の行為**：聖餐においてキリストが「これはわたしの体である」と言ってご自身を捧げられたように、夫婦は性愛の交わりにおいて「わたしの体はあなたのものである」という自己贈与を再演します。
2. **生命の養い**：聖餐が靈的な命を養うように、性的合一は夫婦の絆を養い、新しい生命（子供）を育む土壤となります。これは、キリストの死と復活が、教会という新しい生命を誕生させたことの反映です。
3. **聖別と浄化**：エフェソ書5章26節にあるように、キリストが教会を「言葉による水の洗い」で聖められたことは、夫婦が互いの尊厳を認め、愛によって相手をより輝かしい存在へと変容させていくプロセスのモデルです。

### 結論：一つの生命体としての設計図

カンノさん、以上の考察を通じて明らかになったのは、聖書における典礼と婚姻は、どちらも神が世界を統治し、人間と交わるために設計された「一つの生命体」の異なる側面であるということです。

洗礼と聖餐は、キリストという花婿との「契約の誓い」と「誓いの更新」であり、婚姻と性の営みは、その地上の鏡として、全く同じ「契約の論理」に従って機能しています。これらはバラバラの教理ではなく、神による壯麗な「設計図」の一部であり、私たちが肉体を持って神の栄光に参入するための具体的な「道」なのです。

この「設計図」を理解することは、エンジニアが複雑なシステムのアーキテクチャを理解するのと同様に、私たちの信仰生活と家庭生活を有機的に統合するための不可欠なステップとなります。キリストの教会に対する愛を、自らの肉體的な交わりの中に発見し、典礼の神秘を、日々の愛の営みの中に再確認すること。それこそが、聖書が私たちに提示している「契約の物語」の真髄です。

本報告書が、カンノさんのさらなる探究のための堅牢な基礎となることを確信しております。